

「語り」における日西語時間副詞の意味機能

和 佐 敦 子

(関西外国語大学外国語学部 教授)

松 山 大 学
言語文化研究 第38巻第1 - 2号 (抜刷)
2018年9月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 38 No. 1-2 September 2018

「語り」における日西語時間副詞の意味機能

和 佐 敦 子*

1. はじめに

スペイン語の時間副詞 (*adverbios de tiempo*) とされるものには、次のような副詞がある。

- (1) *ahora* (now), *hoy* (today), *ayer* (yesterday), *mañana* (tomorrow), *anteayer* (the day before yesterday), *anteanoche* (the night before last), *anoche* (last night), *entonces* (then), *pasado mañana* (the day after tomorrow)

このうち、*ahora* (now) は本来発話時を基準とする副詞で、*Diccionario de la lengua española* (<http://dle.rae.es/?w=diccionario>) には、次のように記述されている。

- (2) **ahora** (*de agora*)

1. adv. dem. En este momento o en el tiempo actual. (今または現在)

Estoy empezando a hacer la cena *ahora*.

(I'm starting to make dinner *now*.)

Acabé los cursos de alemán y *ahora estudio* francés.

(I finished the German courses and *now* I study French.)

* 関西外国語大学外国語学部 教授

2. adv. dem. Este momento o el tiempo actual. (今または現在)
 U. normalmente precedido de preposición. (通常は前置詞に先行される)
 La juventud de *ahora* tiene más libertad.
 (The youth of *now* has more freedom.)
3. adv. dem. Hace poco tiempo. (たった今)
Ahora me lo han dicho.
 (Now they have told it to me.)
4. adv. dem. Dentro de poco tiempo. (今すぐ)
Ahora te lo diré.
 (Now I will tell it to you.)

(2)の下線部に示したように、時間副詞 *ahora* は発話時を基準とし、会話文では現在進行形、直説法現在、直説法現在完了、直説法未来と共起する。

一方、発話時が基準とならない小説の地の文などの「語り」の文脈では、*ahora* は直説法過去完了と共起することがある。

- (3) *Ahora* ella había engordado.
 ‘Now she had put on weight.’
 (Eduardo Mendoza, *La ciudad de los prodigios*)
- (4) *ahora* había llegado la hora de la venganza.
 ‘now the time of revenge had come.’
 (Jorge Sanabria, *Crónicas de un adicto*)

本稿の目的は、本来は発話時を基準とする時間副詞 *ahora* が、「語り」の文脈ではなぜ直説法過去完了と共起可能になるのか、また、「語り」において直説法過去完了と共起する *ahora* はどのような意味機能をもつのかを日本語と対照しつつ考察することである。日本語との対照に際しては、中村(2004, 2009)

の「Iモード」と「Dモード」の概念を援用し、スペイン語と日本語の「語り」の特徴を類型論的観点から捉えていく出発点としたいと思う。

2. 先行研究と問題の所在

2.1 工藤 (1993)

工藤 (1993) は、日本語の小説の地の文の時間構造を分析し、「はなしあい」と「かたり」の二分法を提唱し、「語り」における時間副詞の使用について、次のように述べている。

- (5) 〈かたり〉のテキストにおいては、過去形と、発話時ならぬ出来事時を基準軸とする相対的時間副詞が本来的であって、非過去形とダイクティックな時間副詞は排除されているのであるが、その排除された形式をメタフォリカルな時間的意味において使用するという文体的手法が成立してくる。従って、本来的な過去形、相対的時間副詞で表現しようと、文体的な非過去形、ダイクティックな時間副詞で表現しようと同一の出来事を指示しているがゆえに、ここでは〈視点〉の対立が前面化してくるわけである。〈物語世界外の視点から〉〈過去のこととして〉表現する時には過去形、相対的時間副詞が採用される。一方、同じ出来事を、〈物語世界内の視点から〉とらえる時には非過去形、ダイクティックな時間副詞が採用される。

(工藤 1993 : 29-30)

さらに工藤 (1993) は、日本語の地の文では〈はなしあい〉ではありえないテンス形式と時間副詞との共起の仕方が存在することを次のような例を挙げて指摘している。

(6) 彼は急に、赤坊をだいて世田谷神社の夏祭りに出かけた1年前のことをなつかしく思い出した。あの時もバスや自動車の雑音にまじって遠くから、町内の若い衆の打つ太鼓の音が聞こえてきた。

しかし今、ここでは甘い仏蘭西の流行歌がその代わりに流れていた。(留学)

(7) 別の日、彼は野川の向こうの楯状の台地を越えて、府中の方まで足を延ばした。彼の選んだ古い街道は新しい自動車道路とどこまでもからみあって続いた。かつての立川飛行場の付属施設には、いまは白いチャペルが十字架を輝かしていた。防火演習があるらしく、高く中空に上った水に細い虹がかかっていた。

(武蔵野夫人)

(工藤 1993 : 30)

工藤 (1993 : 30-31) は(6)(7)では、「1つの出来事が、テンス形式によって〈物語世界外の視点から過去のこととして〉と同時に、時間副詞によって〈物語世界内の視点から現在のこととして〉表現されながら、二重視点化-複合的時間幻想が想像されている」とし、「〈かたり〉のテキストにおける文の時間的意味(テンポラリティー)の独創性は、このようなテンス形式と時間副詞との選択制限を破って見せることによる、日常的時間表現-日常的時間意識の破壊にあるともいえよう。」と述べて、次のように図式化している。

(8) 外的・内的視点(二重視点) 過去形+「現在」のダイクティックな時間副詞
詞 (工藤 1993 : 48)

「語り」におけるスペイン語の時間副詞 *ahora* と直説法過去完了の共起もテンス形式と時間副詞との選択制限を破っている点では、日本語と共通しているように見える。しかし、ここで問題となるのは、「語り」におけるスペイン語の直説法過去完了と日本語の「～ていた」の機能が対応しているのかということである。

2.2 中村 (2004, 2009)

小説などの地の文における語りは、語り手（作者）が描き出す虚構の世界であり、語り手が表現の選択の中でどのように事態や状況を捉え、描き出すかということが問題となる。

中村 (2004, 2009) は、認知主体による事態把握には、Iモード (Interactional mode of cognition) とDモード (Displaced mode of cognition) という2つの認識のあり方があるとしている。Iモードとは、「認知主体がなんらかの対象と相互作用しながら、認知像を形成する」(中村 2009: 359) のものであり、Dモードとは、「認知主体としての私たちが、何らかの対象とインタラクトしながら対象を捉えていること (認知像を形成していること) を忘れて、認知の場の外に出て (displaced)、認知像を客観的事実として眺めている」(中村 2009: 363) のものであるという。春木 (2014) は、現代フランス語の「語り」における時制の選択について、この2つの認知モードの観点から考察し、次のように述べている。

- (9) Dモード (Displaced Mode) というのは、認知主体が認知対象である事態を外部からいわばメタ認知的に把握する認知モードであり、Iモード (Interactional Mode) というのは、認知主体が認知対象である事態を自らも認知領域の中にあって (身体的) インタラクションを通して把握する認知モードである。人間の本来の認知はIモード的であると考えられるが、それが次第に対象を客観的に見ているかのようになり、Dモード的な言語の仕組みが発達してくると考えられるが、個別の言語の中でこの二つの認知モードのいずれが優勢か、あるいはどのような棲み分けが行なわれているかについては様々なケースがあると考えられる。(春木 2014: 1)

小説の地の文の「語り」において言語化される事態は、語り手がその事態をどのように認知するのにかよって、個々の言語に差が現れるのではないかと思

われる。次に『雪国』の冒頭部の英語とスペイン語の翻訳を見てみよう。

- (10) a. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。
信号所に汽車が止った。 (川端康成『雪国』)
- b. The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky. The train pulled up at a signal stop.
(Edward G. Seidensticker 訳, *Snow Country*)
- c. Al final del largo túnel entre las dos regiones *se accedía* al País de Nieve.
(直訳：2つの地方の間の長いトンネルの終わりに、雪国に入っていた。)
- El horizonte había palidecido bajo las tinieblas de la noche. El tren disminuyó su marcha y se detuvo en las agujas.
(César Durán 訳, *País de nieve*)

(10)において、日本語では「誰がトンネルを抜けたか」が言語化されておらず、読み手には語り手自らが汽車に乗り込んでIモード的に把握した事態であるように感じられる。これに対し、英語では主語を *the train* とし、事態を外側からDモード的に表している。一方、スペイン語では、*se* を使って無人称表現としており、IモードとDモードの間のような事態把握のあり方であるように思われる。したがって、IモードとDモードという認知モードの事態把握のあり方は、「語り」のテキストの分析にも有効であると考えられる。

本稿では、「語り」におけるスペイン語の時間副詞 *ahora* と直説法過去完了の意味機能について、語り手が表現の選択の中でどのように事態や状況を捉えるかという認知モードの観点から考察していく。

3. 「語り」における直説法過去完了の意味機能

3.1 直説法過去完了の2つの用法

Comrie (1985) は、英語の過去完了 (pluperfect) に関して次のように述べている。

- (11) ...The meaning of the pluperfect is that there is a reference point in the past, and that the situation in question is located prior to that reference point, i. e. the pluperfect can be thought of as ‘past in the past’.

(過去完了の意味は、過去に参照点があり、当該の状況がその参照点よりも前に位置づけられるということである。すなわち、過去完了は「過去における過去」と考えることができる。) (Comrie 1985: 65)

Aldai (2009: 22) は、Comrie (1976, 1985) に基づき、スペイン語の直説法過去完了には、「過去における完了 (el perfecto en el pasado)」と「過去における過去 (el pasado en el pasado)」の2つの主な用法があることを指摘し、次のような例を挙げている。

- (12) 「過去における完了 (perfecto en el pasado)」の例
- a. La película **ya se *había terminado*** cuando yo llegué.
‘The movie *had* already *finished* when I arrived.’
(私が着いた時、映画はすでに終わっていた。)
 - b. Yo llegué cuando **ya se *había terminado*** la película.
‘I arrived when the movie *had* already *finished*.’
(私は映画がすでに終わっていた時に着いた。)

c. Pedro llegó a las 5. Para entonces *ya había ocurrido* el accidente.

‘Pedro arrived at 5. By then the accident *had* already *happened*.’

(ペドロは5時に着いた。その時までにもう事故は起こっていた。)

(13) 「過去における過去 (pasado en el pasado)」の例

Pedro llegó a las 5. Él no presenció el accidente. En realidad, el accidente *había ocurrido* a las 4 en punto.

‘Pedro arrived at 5. He did not witness the accident. In reality, the accident *had happened* at 4 sharp.’

(ペドロは5時に着いた。彼はその事故を目撃しなかった。実際には、事故は4時ちょうどに起こっていたのである。)

(Aldai 2009: 23)

この2つの用法の違いについて、(12c)と(13)を例に考えてみよう。(12c)では、*para entonces* (その時 (= 5時) までに) という参照点 (reference point) があり、それまでに完了したということが直説法過去完了で表されている。これに対し(13)では、先行する事態 P: *Él no presenció el accidente*. (彼はその事故を目撃しなかった。) が起こったのはなぜかという理由が後続する事態 Q: *el accidente había ocurrido a las 4 en punto*. (事故はちょうど4時に起こっていたのである。) で直説法過去完了を使って述べられている。

Aldai (2009) によれば、(12c)では「5時」という参照点は直説法過去完了の使用に必須であるが、(13)では、「5時」という参照点は重要性を失っているという。それゆえ、(12c)では直説法過去完了を直説法点過去に置き換えることはできないが、(13)では、直説法点過去に置き換えても許容できることを指摘している。

(12c) *Pedro llegó a las cinco. Para entonces *ya ocurrió* el accidente.

‘Pedro arrived at 5. By then the accident already *happened*.’

(13') ?Pedro llegó a las cinco. Él no presenció el accidente. En realidad, el accidente ocurrió a las cuatro en punto.

'Pedro arrived at 5. He did not witness the accident. In reality, the accident *happened* at 4 sharp.'

(Aldai 2009: 23)

したがって、(13)のような「過去における過去 (pasado en el pasado)」の用法では、参照時との関係というよりもむしろ先行する事態より前であるという相対的な時間関係を表すために直説法過去完了が使用されていると考えられる。

ここで注目したいのは、(12)のような「過去における完了 (perfecto en el pasado)」を表す用法は、会話文にも「語り」のテキストにもみられるが、(13)のような「過去における過去 (pasado en el pasado)」の用法は、「語り」のテキストに特徴的な用法であるということである。そして、直説法過去完了のテンス形式としての意味・機能からの逸脱が起こり、時間副詞 *ahora* が現れるのは、この「過去における過去 (pasado en el pasado)」の用法においてではないかということである。

次節では、物語や小説の「語り」において、この「過去における過去 (pasado en el pasado)」を表す直説法過去完了の用法がどのような機能を示すのかについて考察する。

3.2 「語り」の冒頭部と終結部における直説法過去完了の機能

Kohan (2015: 79) は、物語や小説において、基本的に「語り」は直説法線過去 (imperfecto), 直説法点過去 (pasado), 直説法過去完了 (pluscuamperfecto), 直説法過去未来 (condicional) で表され、会話文は直説法現在完了 (pasado compuesto), 直説法現在 (presente), 直説法未来 (futuro) で表されると述べている。

また、Kohan (2015: 81) は、「語り」における直説法過去完了は「過去に

おける過去 (*pasado en el pasado*)」を表し、「語られる行為よりも前の行為を思い出させるため (*para recordar acciones anteriores a las narradas*)」に用いられると指摘している。したがって、直説法過去完了は、物語の冒頭で使用され、これから語られる事態に対する読み手の関心を喚起する機能を持つことがある。

次の(14)の例は、アルゼンチンの作家フリオ・コルタサル（Julio Cortázar）の短編集“*Final del juego*（遊戯の終わり）”に収められている“*Continuidad de los parques*（続いている公園）”の冒頭部分である。

- (14) *Había empezado a leer la novela unos días antes.* La abandonó por negocios urgentes, volvió a abrirla cuando regresaba en tren a la finca; se dejaba interesar lentamente por la trama, por el dibujo de los personajes.

‘He had started to read the novel a few days before. He abandoned it due to urgent business, opened it again when returning by train to his country house; letting himself get interested again by the plot, by the characters drawings.’

(Julio Cortázar, *Final del juego*)

（彼は2, 3日前にその小説を読み始めた。急用があり一度投げ出したが、農場にもどる列車の中でふたたび手に取ってみた。物語の筋と人物描写が少しずつ彼の興味を引きはじめた。）

（木村榮一訳『遊戯の終り』）

さらに、この直説法過去完了の機能は、次のように小説の各章の冒頭部分にもみられることがある。

- (15) *La noche había caído sobre El Escorial.* Lentamente, Alfonso caminó por los amplios corredores que conducían hasta la capilla.

‘Night had fallen over El Escorial. Slowly, Alfonso walked along the

corridors that lead to the chapel.’

(夜の帳がエル・エスコリアル修道院に落ちていた。アルフォンソはゆっくりと礼拝堂に通じる廊下を歩いた。)

(María Pilar Queralt, *De Alfonso la dulcisima esposa*)

(15)では、直説法過去完了を用いることによって、次に直説法点過去で表される事態の背景として、読み手の注意を喚起しているものと考えられる。(14), (15)にみられる直説法過去完了の用法は、「語り」のテキストに特徴的なものであり、物語や小説において読み手を引き付けるための「語り」の技巧の1つとして用いられていると言えるだろう。

Kohan (2015: 79) は、「語り」における直説法過去完了のもう1つの機能として、“retrospección (回顧, 回想)”を表すことを指摘し、回顧的色彩の濃い「語り」のテキストにおいてよく用いられると述べている。この直説法過去完了の機能はどのような文脈で現れるのだろうか。

次は、イサベル・アジェンデの“*Cuentos de Eva Luna* (エバ・ルーナのお話)”の中に収められている“*Con todo el respeto debido* (人から尊敬される方法)”の結びの部分である。

(16) a. Pero las malas lenguas no lograron destruir el magnífico efecto del secuestro y una década más tarde los Toro-McGovern se habían convertido en una de las familias más respetables del país.

(Isabel Allende, *Cuentos de Eva Luna*)

b. But no evil tongue could destroy the glorious result of the kidnapping, and a decade later the Toro-McGoverns were known as one of the nation’s most respectable families.’

(Margaret Sayers Peden 訳, *The Stories of Eva Luna*)

c. しかし、悪口が誘拐事件の素晴らしい効果を壊すには至らず、10年

後にはトロ＝マクガヴァン夫妻は、国内でもっとも尊敬されている一家として知られるようになった。

(木村榮一・窪田典子訳『エバ・ルーナのお話』)

(16a)で重要な点は、“una década más tarde (10年後)”とあるように、先行する事態よりも後の事態に直説法過去完了が使用されているということである。一方、(16b)の英語訳では、直説法過去完了は使用されず、“were known”と訳されていることに注目したい。(16a)の直説法過去完了は直説法点過去に代えて *se convirtieron* (became) とすることも可能である。しかし、ここで語り手があえて直説法過去完了を使用しているのは、「通常よりも遠い過去 (*pasado más remoto de lo normal*)」を表すためであると考えられる。語り手は、「語り」の終結部に直説法過去完了を用いることによって、実現した過去の事態を過去よりも遠い過去に置くことになり、その結果として、過去の〈回想〉や〈詠嘆〉のニュアンスを付加していると言えるだろう。したがって、(16c)の日本語訳は、(16a)の直説法過去完了のニュアンスを出すために、「知られるようになった」ではなく、「知られるようになったのである」または、「知られるようになったのだった」とした方が適切であるように思われる。

和佐(2016)は、このような直説法過去完了の用法は、日本文学作品の翻訳にもみられることを指摘した。次は、『雪国』の1節である。

(17) 雨のなかに向うの山や麓の屋根の姿が浮び出してからも、女は立ち去りにくそうにしていたが、宿の人の起きる前に髪を直すと、島村が玄關まで送ろうとするのも人目を恐れて、あわただしく逃げるように、一人で抜け出して行った。そして島村はその日東京に帰ったのだった。

(川端康成『雪国』)

(17)で注目したいのは、「のだった」が使用されている事態は、先行する事態よ

りも後に起こっているという点である。(17)のスペイン語訳では、次のように「のだった」が直説法過去完了で訳出されている。

- (18) Rápidamente, la muchacha se arregló el peinado y salió de la estancia casi huyendo, volando casi, no sin antes haber impedido vivamente a Shimamura que la acompañara hasta la puerta como éste había tenido intención de hacer. Era preciso que no los vieran juntos.

Aquel mismo día, Shimamura *había vuelto* a Tokio.

(César Durán 訳, *Pais de nieve*)

(17)では、次のように、「のだった」を使用しなくても、文法的には問題がないが、「のだった」を使用した場合に日本語母語話者に感じられる表現効果は除かれるように思われる。

- (17) …あわただしく逃げるように、一人で抜け出して行った。そして島村はその日東京に帰った。

したがって、(17)で用いられている「のだった」は、事態に対する語り手の〈詠嘆〉の心的態度が込められたモダリティ形式であると考えられる¹⁾。スペイン語訳では、この「のだった」の用法に〈回想〉のニュアンスを付加する機能をもつ直説法過去完了が使用されていることに注目したい。認知モードの観点からは、語り手が結びの部分でIモードに移行し、直説法過去完了や「のだった」を使用することによって、〈詠嘆〉の表現効果が生じていると言えるだろう。

1) 野田(1997: 103)は、「のだった」は、物語的過去に用いられ、関係づけの場合と、物語の進行の中で重要な意味を持つ出来事の発生を述べる場合、詠嘆の場合があることを指摘している。

4. 「語り」における「*ahora* + 直説法過去完了」の意味機能

次に、時間副詞 *ahora* は、どのような「語り」の文脈で直説法過去完了と共に起すのかを考察する。

用例を見ていくと、「語り」の文脈において時間副詞 *ahora* と共に起す直説法過去完了の用法には2種あることが分かった。

4.1 先行する事態との対比・強調

第1の用法は、先行する事態との相対的な前後関係を表すものである。この場合、時間副詞 *antes* (before) が前置され、*ahora* (now) と対比されている。前掲した(3)の例を文脈で見よう。

(3) El amor por su esposa, que *antes* había resistido tantas pruebas, que la había llevado a cometer tantos extremos, no había superado estos fracasos repetidos.

Ahora ella había engordado; del abandono en que vivía se consolaba comiendo pasteles y chocolate a todas horas; nunca faltaba quien le regalase a ella las golosinas más tentadoras creyendo que obtendría por este medio el favor de él.

(Eduardo Mendoza, *La ciudad de los prodigios*)

‘His love for his wife, which had withstood so many trials *before*, did not survive these repeated failures. Abandoned, she became fat, consoling herself with cakes and chocolate all day long; somebody was always offering her sweets in the hope of winning her husband’s favor.’

(Bernard Molloy 訳, *The City of Marvels*)

(以前、あれほどの試練に耐え、あれほど過激な行動に走らせた妻への愛情も、このたび重なる不運に打ち勝つことはできなかった。いまや夫からかえりみられなくなった彼女は、四六時中、ケーキやチョコレートを食べたせい

で肥満してしまった。オノフレの野心が買えると思って、いかにもおいしそうな、甘いものを彼女にプレゼントするものは絶えなかった。）

(鼓直・篠沢眞理・松下直弘訳『奇蹟の都市』)

次の(19)、(20)の例も同様である。

- (19) *Antes* el cuerpo era una ayuda para la poderosa alma de Adán ; *ahora había caído* y su poder fue limitado por la cubierta de la carne.

‘*Before* the body was a help to Adam’s powerful soul ; *now the soul had fallen*, and his power was circumscribed by the shell of the flesh.’

(かつて肉体はアダムにとって強靱な精神の助けとなっていたが、今やそれは衰え、その力は肉の覆いによって制限されていた。)

(<http://www.aguasvivas.cl/multimedia-archive/el-poder-latente-del-alma/>)

- (20) Los padres, preocupados, acudieron al Rabino. Obedientes, siguieron su consejo, pero el niño aún se negaba a estudiar la Ley. De hecho, mientras *antes* sólo se aburría, *ahora había tomado una actitud rebelde*.

‘The anxious parents went to the Rabbis. Obediently, they followed his advice, but the boy still refused to study the Law. In fact, while *before* he only was bored, *now he had taken a rebellious attitude*.’

(両親は心配してラビのところに行った。彼らは従順にその助言に従ったが、その子はまだ法典を勉強することを拒否していた。実際、以前は退屈していただけだったが、今は反抗的な態度をとっていた。)

(<http://www.mesilot.org/esp/relatos/aprenditora.htm>)

(19)(20)で重要なことは、*antes* (before) は直説法線過去とともに使用され、それよりも後に続く事態が「*ahora* (now) + 直説法過去完了」で表されているという点である。この文脈では、語り手が先行する事態からの変化の著しさに感慨

を覚えていることを示すために直説法過去完了が使用されているものと考えられる。ここでは時間副詞 *ahora* (now) は、先行する事態からの変化の文脈で使用され、先行する事態と「語り」の文脈における今現在を明確に対比し、事態を前景化するために必要不可欠な副詞であると言えるだろう。

日本語で書かれた文学作品の翻訳にも、次のような例が見られる。

- (21) a. 雷鳴は更に激しさを増していた。今では雨も降り始めていた。雨は怒りに狂ったみたいに横殴りに窓ガラスを叩き続けている。

(村上春樹『1Q84』)

- b. Los truenos fueron intensificándose. *Ahora se había puesto a llover.* Como en un arrebato de ira, la lluvia golpeaba de lado los cristales de la ventana sin cesar.

(Gabriel Álvarez Martínez 訳, 1Q84)

(21a)は天候の著しい変化を前景化する文脈であるが、日本語の「今では～ていた」をスペイン語では「*ahora* (now) + 直説法過去完了」で訳出されていることに注目したい。この用法での *ahora* に相当する日本語は、過去の事態との対比を表す「今は」、「今では」、また「今」に強意の間投助詞「や」を付加した「今や」と訳出することが適切であると思われる。

4.2 事態の展開の局面を強調

第2の用法は、時間副詞 *ahora* が *había llegado la hora* (the time had come), *había llegado el momento* (the moment had come) などといった「語り」の展開の局面で使用されることが特徴である。前述した(4)の文脈を見てみよう。

- (4) El enemigo había esperado con mucha paciencia aquella oportunidad y no tenía la mínima intención de desperdiciarla; *ahora había llegado la hora de la*

venganza, le tocaba su turno de pagarle con la misma moneda y disfrutaría el momento.

‘The enemy had waited for that opportunity with much patience and didn’t have the slightest intention of missing it; **now** the time of revenge *had come*, it came his turn to pay him in the same coin and he would enjoy the moment.

(敵はその機会を辛抱強く待っていて、それを見逃すつもりは全くなかった。今まさに復讐の時がやってきたのだ。お返しをする番がやってきて、彼はその瞬間を楽しむだろう。)

(Jorge Sanabria, *Crónicas de un adicto*)

(4)は、復讐の様子を描写した「語り」の文脈であるが、いよいよその時がやってきたという切迫した場面で *ahora* が使用されている。次の(22)の例も同様である。

(22) Transcurrieron exactamente veintinueve años desde que el proyecto se puso en marcha y *ahora, había llegado el momento de comenzar con la parte más fascinante*. Todo estaba previsto para ese instante.

‘Exactly twenty-nine years elapsed since the project was launched and now, the moment had come to begin the most fascinating part. Everything was planned for that moment.’

(その計画が動き出してからちょうど29年が過ぎ、今まさに最も魅惑的な部分に着手する時がやってきたのだ。その瞬間のためにすべてのお膳立てはできていた。)

(Tomás Morilla Massieu, *Al final del abismo*)

(4)(22)において時間副詞 *ahora* は、「語り」における切迫した事態の展開の局面を前景化するための必須の要素として用いられている。このような文脈における

ahora の日本語訳は「今まさに」が適切である。また、スペイン語では直説法過去完了が使用されるこの用法では、日本語では「～ていた」ではなく、「～ただ」とするのが適切であると思われる。

以上の考察から、本来は発話時を基準とする時間副詞 *ahora* と直説法過去完了との共起は、「語り」の文脈においてIモードに移行するために用いられ、語り手の感慨や切迫性を表し、事態を前景化する効果を生じていると言えるだろう。

5. お わ り に

本稿では、本来は発話時現在を基準時とする時間副詞 *ahora* (now) が、「語り」の文脈で直説法過去完了と共起する点に着目し、認知モードの観点から、「語り」のテキストにおける「*ahora* + 直説法過去完了」の意味機能を中心に考察した。主な論点は、次の通りである。

- 1) 「語り」における直説法過去完了には、「過去における完了 (el perfecto en el pasado)」と「過去における過去 (el pasado en el pasado)」を表す用法があり、「過去における過去 (pasado en el pasado)」の用法は、時系列的に並んだ出来事の連続の記述を中心として展開される「語り」のテキストに特徴的な用法である。
- 2) 「語り」において、直説法過去完了は、物語の冒頭で使用され、これから語られる事態に対する読み手の関心を喚起する機能を持つ。また、物語の終結部では、先行する事態よりも後に起こった事態に使用され、〈詠嘆〉の意味機能を表す。
- 3) 「語り」において時間副詞 *ahora* が直説法過去完了と共起するのは、Dモードの語りからIモードに移行する場合であり、先行する事態からの顕著な変化を表す場合と切迫した事態の展開の局面を表す場合であり、語られ

る事態を前景化する機能がある。

日本語には直説法過去完了に相当する固有のテンス形式がないことから、物語や小説などの翻訳に際しても、会話文と地の文ではテンス・アスペクト形式にどのような違いがあるのかを明確にする必要がある。また、「語り」において指示形容詞を用いた時間を表す表現や場所を表す指示詞がどのように使用されるのかについても考察し、スペイン語の「語り」における認知モードの特徴を日英語と対照し、類型論的観点から考察していくことが今後の課題である。

参 考 文 献

- Aldai, Gontzal. (2009) Aoristo perifrástico, perfectivo y pluscuamperfecto : Leizarraga vs. Lazarraga. *ASJU*43 (1): pp. 19-36. Universidad del País Vasco.
- Comrie, Benard. (1985) *Tense*. Cambridge : Cambridge University Press.
- 春木仁孝 (2014) 「フランス語の時制と認知モード 時間的先行性を表さない大過去を中心に」春木仁孝・東郷雄二(編)『フランス語学の最前線』2 : pp. 1-44. ひつじ書房.
- Kohan, Silvia Adela. (2015) *El tiempo en la narración*. Barcelona : Alba.
- 工藤真由美 (1993) 「小説の地の文のテンポラリティー」言語学研究会(編)『ことばの科学』6 : pp. 19-65. 麦書房.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房.
- 中村芳久 (2004) 「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」中村芳久(編著)『認知文法論Ⅱ』pp. 3-51. 大修館書店.
- 中村芳久 (2009) 「認知モードの射程」坪本篤郎他(編)『「内」と「外」の言語学』pp. 353-393. 開拓社.
- 野田晴美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版.
- 和佐敦子 (2016) 「「語り」に見られる事態把握の日西対照研究」『国際モダリティワークショップ発表論文集』9 : pp. 41-50. モダリティ研究会.
- 和佐敦子 (2018) 「「語り」におけるスペイン語時間副詞の意味機能」『国際モダリティワークショップ発表論文集』13 : pp. 49-58. モダリティ研究会.
- 和佐敦子 (2018 刊行予定) 「「語り」におけるスペイン語直説法過去完了の機能」澤田治美・仁田義雄・山梨正明(編著)『場面と主体性・主観性』ひつじ書房.